

再刊「バスケットリーの定式」について

本間一恵

真新しい本が届いた。平凡社から出た「住まい学エッセンス」シリーズの一冊で、2024年7月24日初版第一冊発行と奥付にある。その一方、まえがきの前には、「本書は1988年、住まい学体系の一冊として住まいの図書館出版局より刊行されたものです。」と書かれている。その旧版に島崎慶子による解説と著者関島寿子の新版あとがきとが加えられて、35年ぶりに復刊したのがこの本である。紙質もデザインもすっきりとした新しい顔つきで、少し面長になったような印象だ。

刊行された当時、バスケットリーという言葉聞いてすぐ理解する人たちは限られていたと思う。現代的なかご作りと言われても、どういうものを思い浮かべるべきか戸惑ったはずだ。まわりにかごは沢山あるにしても、どうやらそれではないらしいことは著者の作品写真から伝わってくる。そして、内容を読み進むにつれて、編むことの世界が、どうやらとんでもなく豊かなものに見え始める。一方で「バスケットリーの定式」というタイトルに少し違和感を覚える。かご作りの定式を伝えたいわけではなさそうだと。

この本に大いに影響を受けたと語る人に、これまで何人も出会ってきた。実際バスケットリーに魅了されて作り続けてきた人たちは当然として、まったく別の分野で活動する作家にもそう語る人が何人もいた。だいたい時間を隔てた今でも何かを作る人間にとって、制作の核心を自分に引き寄せて考えるために役に立つだろう。手を使って作る、という意味だけでなく、それを通じてもっと広く思考すること、世界を広げていくことの手掛かりになる。

「かごは信じられないほどにおもしろい」と言い切る著者が、制作を始めたところからの経験をもとに、自分のスタイルを構築していく過程が語られている。かご特有の構造分類や素材とのかかわりの中で、思想が形作られ、それが作品へと結実していく様子は、作ることの根底を考えることになる。

新版において島崎は、掲載写真の作品それぞれについて、聞き書きによる丁寧な解説をつけている。それが助けになって、単に技術とか色や形、物語的側面とかでなく、少し特殊かもしれないバスケットリー作品の見方が、伝わってくる。素材と向き合うことで生まれる発見や工夫や実験的試みなどの過程が、制作の原動力となって最終的な作品に行きついていく。本来、工芸全般そうなのであろうが、シンプルでプリミティブな「かご」というジャンルならではの、だれもが容易に近寄れて、感じる事ができる面白さだ。

私個人としては、はじめにこの本を読んだ時に、はっきりと残った部分が二つあった。まず、冒頭に出てきた「先史時代の人とだって話せる」というフレーズ。あの時は、かごの歴史の古さとか、かごというメディアで時空を超えて通じ合えるかもしれないという漠たる共感だったけれど、その後、先史時代のかごを実際に復元するというチャンスに恵まれてしまった！編組品の類が縄文遺跡から続々見つかるようになった時代にたまたま行き合わせたからであるが、編むことをはじめてから何年も経ってから、思いがけない展開が待っていた。

もう一つは、一番最後の部分。「あなたは自分がアーティストだと思うか」という問いかけを受けた時の話。彼女の考えるアーティストはなかなかハードルが高く、「ここに書いたような意味のアーティストになりたい、」というのが答えだと結ばれている。「アーティスト」という名称はともかくとして、どうありたいのかという問い自体は、その後ずっと消えずにいる。

はじめに、新刊は前より面長の印象と書いたが、比べてみたらサイズ的にはぴったり同じだった。少しだけ厚みが増したことやデザインの新しさもあって、バランスの変化を感じて縦横サイズが違って見えたらしい。一冊の本も、ボリューム、かたち、色、デザインなどいろんな要素で成り立っていて、何かがちょっと変わると違って見える。たとえ中身は同じでも、時間が経ってから読み返すと当然違うはずだ。何が違ってきたか確認するために、また読み直そうと思う。

